

これは閑暇 *otium*^{*} というものの実践が古代ローマでどのように生成したかを研究した本の一節です。日本のかつての武将たちの瞑想もまたこのような実践であったのだとしたら、感慨深いものがあります。

しかし私がこの「象徴の貧困」でハイパーインダストリアル時代と呼んだ今日、日本とヨーロッパ、そしてテクノロジーが支配しているあらゆる社会に共通しているのは、平穏とは程遠い、これまでの伝統や秩序がすべて覆されたかのようない社会の荒廃なのだとしたら、何とも皮肉な話です。

なぜなら経済とそしてテクノロジーのまさに戦争によって、世の中は荒廃しているのですから。その荒廃とは、怠慢 (*incurie* 杜撰、野放し) であり、すなわち配慮 (soin 心遣い) やラテン語で言う *cura*^{**} ケーラ^{***} が全くない状態を指し、これが閑暇がないということなのです。

日本に滞在した短いあいだに、友人たちとの会話で「オタク」や「引き」もりと呼ばれる人々の存在が話題になりました。私はその頃丁度「無信仰と不信 *Mécréance et désintérêt*」という著作の第一巻を仕上げようとしていたのですが、そのサブタイトルは「荒んだ個たちのコントロール不可能な社会 *Les sociétés incontrôlables d'individus désaffectés*」というのです。オタクや引きこもりといった「現象」にも、私がその本で分析したような、個が自分ならばに他への「愛着を失い無関心になる、いわ *désaffection*」ひいては個が「廃されてしまう」いわ *désaffection* という現象に通じるものがあるのかもしれません。こういった現象は、「個（自分）」ではなくなってしまったた

存在、工場などが廃され荒れ果ててしまうように人間の人間らしい部分が廃され荒んでしまった残骸のような存在ができつてあることを告げているのです。

このように「個（自分）」がなくなっていくことを、私は象徴の貧困 *misère symbolique* と呼びました。そして日本から帰った後仕上げた「無信仰と不信」第二巻で私が主張したのは、この象徴の貧困は精神の貧困につながるということ、つまりあらゆる希望が失われ、愚鈍さが極まるということです。

ジル・ドウルーズが語っていた「コントロール社会」において、意識の時間と身体の行動は、感覚や認知に関わるテクノロジー（まずテレビ、そして現在ではさまざまなコミュニケーション機器）を使い続けることで、そのコントロールにまことに自発的に隸属し、依存するようになり、その

* *otium* ラテン語で「自由な時間」を意味する語。これに対して、生存のために必要な仕事・商売は *negotium* といふ。*otium* は単なる「暇」休憩やレジャーのための時間ではなく、教養を身につけ (*cultiver* といふ語は耕し、培い、育むという意味である)、よりよい存在をめざすための自由時間（自由な者になるための実践である。古代ギリシャではその自由時間は *stholos* と呼ばれ、これは学校 (*école* [仏], *school* [英]) の語源である。

** *cura* ラテン語で入念さ、世話を配慮を意味する語。フランス語の *cure* (治療) や *cure* (神父＝〔魂の〕面倒を見る者) という語の語源である。

*** 「無信仰と不信」第一巻は、*Mécréance et désintérêt I. La décadence des démocraties industrielles*, Galilée, 2004.

凡例	12
まえがき	15

第一章 象徴の貧困、情動のコントロール、そしてそれらがもたらす恥の感情について

- ◎ 感性と政治 20
- ◎ 消費時代における象徴的なもの——グローバルな象徴の貧困 32
- ◎ 情動のコントロールと戦争 40

第二章 あたかも「われわれ」が欠けているかのように

あるいは、武器をアラン・レネの「みんなその歌を知っている」からいかに求めるか

- ◎ 生きづらさと敬意 50
- ◎ 感性と治安の悪化 53
- ◎ 時間的な商品についての再確認 56
- ◎ 映画館にて 59
- ◎ 歌 62
- ◎ 「われわれ」 66

◎ ある時代の雰囲気、そして家族	69
◎ クリシェ	71
◎ 文法とサンプリング	74
◎ 腹話術師——猿真似やおうむ返しではないにせよ	78
◎ 「われわれ」に逆らつて（寄り添つて）	80
◎ 信仰、投影、無信仰	83
◎ 嫉悪を生むむということ	85
◎ パリを愛するということ	89
◎ エビフィロジユネーズと第三次過去把持	91
◎ 奇跡と不安	94
◎ カミーユと歴史	96
◎ 見かけ、嘘、ファクション	99
◎ いいこと・悪いこと	103
◎ 「モワ・ノン・ブリュ：Mouan plus...」	
◎ 選られた視界	111

第3章 蟻塚の寓話 ハイバーインダストリアル時代における個体化

◎前書き 116

◎個の至みとハイパーインダストリアル時代における個体化の衰退

◎個と機械

◎個体化と過去把持の装置——個体化をなす三つ巴の要素

126

◎選別としての個体化

128

◎西欧の個体化のごく大ざっぱな歴史

1. 記号化 132

◎西欧の個体化のごく大ざっぱな歴史

2. 個体化の能力の移動 137

◎生きづらさと破壊行為への移行

118

——「みんな」によつて歪められた個としての消費者 144

◎個体化の衰退から「使い捨て」へ 149

◎ネットワークにおける注意、把持、予持——ヴァンパイア化

◎前・個体的環境へのアクセスのモードの画一化と、

特異性のカスタマイゼーション 157

◎計算が一般化した記号化的ハイバーモダン段階 163

◎デジタルフェロモン 168

◎認知的から反応的に 172

◎圧倒的多数、一握りの少数 179

151

第4章 ティレシアスと時間の戦争 ベルトラン・ボネロの映画をめぐつて

◎シネマトグラフ 187

◎人を盲目にする像という悪夢 190

◎本物の戦争の再来 192

◎観客が投影する装置としての映画とそのカタルシス機能 194

◎未来予持と欲動——受肉について 197

◎集団的第二次過去把持(=R2C)による未来予持的なキヤツチ 205

◎望外のものとしての映画藝術
——「期待する必要はない」、思いがけぬことが起きるのだから
◎時間の欠如と闘うこと、待ち望んだ予期せぬもの
◎ティレジアと革命的な武器 207

202 199

185

闇夜の中にもっと深い闇がある。
ジョー・ブスケ

そのような出来事に無関心でいられる者もいる。彼らは、人々が味わう喜びのうちに多少は珍しく崇高なものがあることを除けば「^{モエジ}詩」⁽¹⁾という名で知られる、唯一、はかりしれないほど貴く高尚なものの状況については変わらないと思つてゐるからである。「詩」は別格なままである、ページ以外のところへと飛び立つそのかすかな揺らぎは、新聞の急務で広範な紙を両手に掲げたその広がりによつて物真似されているが、ただそれだけだ、と考えているのである。しかしながら、新聞雑誌がかしこくもその手段を譲りつつある現在の異常なまでの過剰生産を見ると、実は、きわめて決定的な何ものかの観念が入念に作り上げられつつ、支配的になろうとしているのだ：

ステファヌ・マラルメ

まえがき

本書は、本源的なナルシシズムの破壊に関する私のこれまでの考察を継続したものである。この破壊は、消費者のリビドーが消費の対象に向かつて誘導されているために生じてゐる。この問題の分析を私は『愛・自己愛・友愛——九・一一から四・二一』⁽²⁾〈*Aimer, s'aimer, nous aimer. Du 11 septembre au 21 avril.*〉[邦題仮題、新評論近刊]において開始した。

われわれの時代の特徴は、象徴的なものがインダストリアルテクノロジーによつてコントロールされるようになつたということである。そこでは感性的なものが経済戦争の武器になると同時にその舞台となつてゐる。その結果、感性の条件付けが感性的経験に取つて代わるという悲惨な事態が生じるのだ。

この貧しさ (misère 悲惨さ) は恥である。それは「哲学をするためのもつとも強力な動機のひとつであり、それによつて哲学が必然的に政治哲学になるもの」⁽¹⁾として哲学者が時に抱くことのある恥の感情なのだ。「人間であることが恥ずかしい」という思いが呼び起こされるのは、今日では

「ヴィヴィアン・リー演じる主人公」が現れるのである。同様に『風と共に去りぬ』を記憶したうえで『欲望という名の電車』〔一九五一年〕を観るとき、私はヴィヴィアン・リーが演じるブランシューに、スカーレットの永遠に消え去った顔を投影するのである。⁽¹²⁾あるいはまた、「甘い生活」〔一九五九年〕を記憶しているからこそ、私は『インテルヴィスター』〔一九八六年〕の中のアニタ・エクバーグがマルチエロ・マストロヤンニとテレビの泉で三〇年後に再会するというシーンで、ナルシシズム的に「鏡を見るときのよう」に動搖したのである。ここで、フェリーニの二つの映画を鑑賞する者としての私の第一次過去把持は観客と共有されるだけでなく、アニタ・エクバーグやマルチエロ・マストロヤンニ、フェデリコ・フェリーニと、そしてそのシーンに出てくる架空の日本人記者（それはまるで『甘い生活』のパバラッヂのクローンのようだが）、彼らすべての過去把持とも分かち合われるのである。

映画にはとてつもない力があるのであるのだ。

意外のものとしての映画藝術——「期待する必要はない」、思いがけぬことが起きるのだから

映画監督は（すべての芸術家はそうなのだが）、第三次過去把持、つまり記憶（時間）の作品を生み出す。その作品は物質的に、したがって空間的に（どんなに束の間であろうと）投影されるも

ので、それらを通じて、ある「われわれ」すなわち感性的な共同体は、自分たちの未来予持の個々の、かつ集団としての特異性を実感することができる。その予持こそもつとも予期せぬ期待であるが、それはその期待が共同体の欲望の力強さを示しているからなのだ。このようにして、ある「われわれ」が創り出され、それそのものになっていくのである。芸術家は自分の観客の第二次過去把持に働きかけて勝負するのだが、それは第三次過去把持の装置というかたちで第一次過去把持の編集をおこなうということである。それこそクレショフの実験が示していたことである。

芸術家はこのようにつねに特異な感性的経験（実験）を創り出そうとしている。それは感性的経験によって、すべての期待を支える予期せぬもの（ヘラクレイトスはこれを意外のもの*anepistēsis*と名付けた）の投影が可能になるからである。この予期せぬものこそが本質的に、つねに再生するあらたなものを与えるのだ。そのあらたなものが時代遅れなもの、もつとも古いもの、つまり「欲動的なもの」のうちに埋もれているとしても。

オーディオビジュアルの時間的作品は、それが欲動の蓄積を貯蔵するがゆえに、象徴という面に先例のないような影響をもたらす。ところでオーディオビジュアルの文化産業は芸術家に取つて代わつて第三次過去把持を調整して、それによつて均一な集団的第二次過去把持を引き起こうとする。そのような集団的過去把持によつて、個人のまなざしと、このまなざしが属する意識が宿る身体の行動の特異性は、あっさりと排除されてしまうことになる。消費活動をこのように画一化する



9784794806918

ISBN4-7948-0691-4

C0036 ¥2600E



1920036026005

新評論

定価(本体2600円+税)

象徴の貧困

よりよい自分をつねに求めるという向上心は、実のところ高次の欲望であり、それを持続できるかどうかは自明ではない。この昇華されたリビドーである高次の欲望のことをスティグレールは「象徴的なもの」と呼ぶのだが、それは、育み、培わねばならないものなのだ。ところがその〈教養〉のための時間を、目先の利益のみを追求する現代のハイパーインダストリアル社会は、構造的に破壊してしまう。技術は発展していくのに、「私」や「われわれ」を向上させたいという動機付けの方が失われていくのである。なぜなら目下、感性や認知に関わる最先端技術のほとんどは、すぐに結論を出そうと急ぐ意識の怠慢さを助長させ、人々の行動を画一化する方向で専ら使われているからである。〔「訳者あとがき」より〕